

# 変わる都市

共同通信社編著

共同通信社, 1300円

〒107 東京都港区赤坂1-19-20  
(電話 03-584-3041)



## 現代都市の最新ルポ 変化の中で守るべきものとは

法政大学教授, 都市プランナー  
田村 明

本書は、共同通信社のスタッフによって集められた世界48都市の生きた最新の表情を伝えるものである。1989年3月までの1年間、加盟三十数紙に「変わる都市 魅力再発見」と題して掲載され、このほど1冊にまとめられた。

「歴史の保存と再生」、「市民の手が変える」、「近代化の光と影」など8章に分かれており見やすいが、どこから読んでも、肩が凝らずに読める。ロンドン、パリ、上海ばかりでなく、一般の人々にとっては、訪れる機会の少ないセネガルのダカールやブータンのティンブーまでも含めて世界をひと回りする楽しい読み物になっている。

この企画の狙いは、進行する都市化の流れのなかで、東京への過度の一極集中や狂乱地価など、日本の都市に迫ってくる危機に対するヒントを見つけようとするものだが、書物ではそのような大上段に構えた姿勢を避けて、読者がさりげなく、世界の各都市を飛び歩きながら、自然に現代都市の問題への関心を深められる。掲載されている

多数の写真も美しい。建築関係者にとっても、世界の都市情勢を気軽に知ることができる手頃な読み物である。

こうした企画は、とかく欧米偏重になりやすいが、この書物で扱う都市は、中近東の4都市を加えてアジアが17都市と最も多いのが注目される。

西欧は12都市でそれに次ぐが、今激動の東欧とアフリカがそれぞれ4都市、オセアニア3都市、中南米はちょっと少ないがバランスもいい。

先進国から発展途上国まで、大は1000万人を越す都市から、小は3万人の小都市までを、わずかな字数のなかで一様にまとめるのは至難の業であろう。従って各都市によって精粗まちまちで、とらえる角度も記者により多様になるのはやむをえない。現代都市はますます複雑な様相を深め、よほど切り口を限定しない限り、かなりのページを費やしても、ひとつの都市の状況さえ解説することは難しい。

\* \* \*

現代は明らかに「都市の時代」に突入した。大多数の者にとって都市はもはや逃れることのできない存在になっているが、その変動が余りにも急激で自らもその渦中にいるために、都市とは何かさえも見失いかけている。特に日本では「変わらない都市」とは、す

なわち立ち遅れた都市と見る人々も多く、変動そのものが都市の最も基本的な体質になってしまい、そのなかで都市は全く変質してしまった。

それに対して、本書が共通して言うことは、各国の都市が様々な変動のなかにあっても、どうして自らのアイデンティティを保持していけるか、都市生活のなかで市民はいかにして生き生きした生活を確保していこうとしているかに焦点が当てられている。

「変わる都市」という表題だが、むしろ大半は変わる必然性に対応しながらも、どう「変わらない都市」を持ち続けていくことができるか、つまり都市としての独自の文化や個性を持ちうるかが追求されている。そうした目で見ると、一見ランダムな本書の都市もひとつの筋で見えていくことができる。

それは、変動というフローにのみ偏重的に価値をおいて、世界を相手に稼ぎまくり、自らの都市の個性を喪失している日本の諸都市へのひとつの警鐘ではないだろうか。

日本の高度成長は、他に誇るべき文化性ある都市をその蓄積として作ってきたであろうか。果たして将来の都市における市民生活を質量ともに豊かなものとする基礎を作ったのだろうか。このふたつの疑問には、今のところ残念ながら満足な答えは出ていない。

\* \* \*

都市が市民の共同作品であるという認識に立てば、都市をどのようなものにするかは、最終的には市民の責任である。「時間のかかることです。いつも討論、討論、その過程が大切なのです」という本書にあるエルランゲン市長の言葉が印象的である。わが国でも都市作りの討論を始めるべきときであるし、市民の共同の場としての自治を育てていくことが求められている。